

## 第十一編 荒野を経て新しい秩序へ

(ジャラモギ オギンガ オデインガの英雄的生涯 そのIV)

ジャラモギ オデインガは、盟友と信じていたケニアッタ初代大統領とKANU書記長のムボヤに副大統領の席を剥奪され、野に下りKPUを組織するが、その議会内勢力は半減する。更にKANU執行部の執拗な追求にあい、政治集会や出版についても自由を奪われ、選挙に立候補することすら阻まれる中で、ケニアッタのキスム集会での挑発を契機に、KPUの騒乱が勃発し、ジャラモギ以下幹部が逮捕投獄され、KPUは、非合法化された。こうしてジャラモギの政治活動は圧殺され、KANUにおけるケニアッタ、モイの体制が確立してゆく。ジャラモギは、それでも、一貫した多党制民主主義を主張し、経済活動を通じて人々との接点を確保し続ける。

### (7) 荒野の時代 1971—1989

オギンガ オデインガが、拘留から解放されたのは1970年の後半であった。小休止の後、彼は活発な政治活動に復帰しようとしたが、彼の政治的な道筋は、全く閉ざされていることに気付かされた。当初オデインガは、自分たちKPUの活動を、再びKANUの中で行なう事を追求した。しかし、そうはならなかった。KANU指導部は、1974年に全てのKPU指導者たちの“転向”を条件とすることを決定したからであった。これは、KANUの幹部が、わけのわからぬルールを使って、市民や議会の選挙でKANU候補として立つための条件として、「真実の心の変化」(a genuine change of heart)が達成できたかどうかを判定することを意味していた。1974年に、オデインガと彼のKPU時代の同志達は、実質的に、選挙に出るのを禁じられていることに気付かされることになった。というのは、KANUは、「真実の心の変化」は起こっていないと判定したからである。

次にオデインガは、KANUそのものの内部で指導部を獲ろうとして、1977年に同党の会長職を争うことを宣言した。その結果、理由も無く、党選挙は行なわれなかった。オデインガは、再び市民社会に彼とケニアッタの会談を作り上げることを約束した。この結果、彼は、当時ポール ムブヤ (Paul Mbuya) に率いられていたルオー組合にケニアッタの家族と接触させた。そして、1977年にケニアッタのナクル滞在にむけてルオー代表団を派遣することになった。しかし、州政府が、イニシアチブを奪ってしまったために、オデインガも彼の幕僚達も会談に参加することを許されなかった。

彼はしばしば権力を持ったインサイダーであるチャールス エンジョンジョを彼とケニアッタの間の壁をつくった人間として非難した。ケニアッタは既に政治的信念と実践のレベルで、オデインガのそれとかけ離れた国の仕組みを作り上げていた。その仕組みとは、

1970年代において、大統領による個人的な力やケニアッタ ファミリーの後援や、横柄な西側寄りの法務大臣（Attorney-General）であるエンジョンジョや、公的富を私的に蓄積しようと動いている官僚層等に基盤を置いたものだった。

1978年のケニアッタの死去とモイ大統領の誕生は、オデインガを含む全ての政治家によって注意深く注視されていた。というのは、モイ大統領が個人的指導力を、ケニアッタとは異なる形で発揮するかもしれないという期待があったからだ。そして恐らくはケニアッタ体制の下で排除されていた人々に日の目を見させてくれるかもしれないという期待があったからであった。モイは、色々な人々に意見を打診したが、1979年まで彼は、KANUの支配層を揺るがすような事は何一つしなかった。その年に、（元）KPUの指導者達は、オデインガも含めて、KANUの切符で選挙に立候補することを再び拒絶された。後になって、モイは、傷を和らげるように小さな準国営の組織の会長職に何人かの指名を許可している。つまりオデインガ、オネコ、オボクである。1980年に、オデインガに、綿とリントのマーケットボードの会長になることを許した。これはオデインガにとって最初の間となり、ほぼ15年に亘って国中を自由に旅行できることになった。彼はこれをまじめに捉えた。一年の間、彼はブシアからラムにかけての農民たちに綿の栽培を促したし、適宜メディアの注目を受けるようになった。次の年に、モイとオデインガは、ボンド（Bondo）の議会の議席をオデインガに用意することで合意に達した。この取引は、現職の議員、ジョナ オウゴ オチエングが自主的に彼の議席を辞退することが必要だった。こうして、オデインガは、政治的舞台への再登場の道筋を踏み固めていった。しかし、モンバサの駅で、オデインガが、故ケニアッタを「土地の篡奪者」と呼んだことから不運が襲った。モイは、ケニアッタのイメージを守ろうとしてすばやく動いた。無論、彼はオデインガとの約束を無視する事でその意思を示した。オデインガは、1981年のボンドの補欠選挙を争うことが出来なかった。

この時までには、オデインガが、モイの進めるやり方に満足できなくなっていたことは、明かであった。1982年の初めに、彼は、政治的腐敗に対し、外国の軍隊に軍事基地を提供する事に対し、はたまた、この国の縁故採用に対し、大規模なプレス攻撃を開始した。直ちに、彼は新政党の登録の準備に取りかかった。彼は、ジョージ アンヨナ、アチエノ オジアンボ、パトリック スンバ、ライラ オデインガ、サリム ローンをこのプロジェクトに引き込んだ。政党設立の根回しや骨組み作りは、政府が邪魔をしようとした時には、既に出来あがっていた。急襲が行なわれた。アンヨナは、逮捕され、憲法は議会で修正され、1982年6月の2A条項で、「一党制」が打ちたてられた。

更にオデインガの政治領域に問題が持ち込まれた。オデインガは、自宅監禁の処置を受けることになった。彼は14ヶ月に亘りキスムの湖畔の家に閉じ込められた。従って、

1983年は、オディングにとって、政治的に失われた時となった。彼が開放された時、オディングは、初期の一つの考えに立ち戻った。それは、ルオーのコミュニティーに経済的な力をつける事だった。彼は、オディンジ オデラ、アチエノ オジアンボ等を糾合して商事会社であるラモギ開発信託社を発足させた。しかし、政府は、迅速に動いて、同社の登録を拒否し、一切の同社の集まりを違法であるとした。オディングは、この時、体制が彼のあらゆる動きを封じ込め、明かに政治家としてハンディキャップを負わそうとしていることを思い知らされた。しかし、一つだけ窓が開いていた。体制が頻繁に対応を変える度に、強い調子の手紙を大統領のモイに突き付ける事だった。また、オディングは、1986年から1987年にかけて、逮捕され 且つ 秘密組織 (Mwakenya) に属していると簡単に判決を言い渡される人々の、司法上の政治的且つ民主的権利を、大声をあげて守った。

10年が過ぎた時、オディングは、更に「多党制」の主張を大きくしていった。彼の主張は、1988年までに、KANUに替わるべき政党がないわけではないということであったし、その主張はプレス報道で明らかであった。この年に、政府は、KANU候補を議会や市民の代表の席に据えるために縦隊投票方式 (Mlolongo) を導入した。これは、オディングを含めて多くの民主主義者に毛嫌いされ、1988年の選挙の結果について、落選者達から、八百長選挙の非難を浴びたほどだった。オディングと彼の嘗ての同志たちは、今度も、立候補できなかつた。こうして、オディングは、約20年に亘って、政治的荒野をさまよったことになる。

\*Mlolongo : 候補者が、人々を集め列をつくらせ、数を数える方式。人々は、IDカードと指に赤いインクをつけられ、投票と見なされた。人々をめぐり公然と買収がおこなわれた。

しかし、この間、オディングは、親友ダグラス オジアンボやオディンジ オデラと非常に深く知りあう機会を得たし、体制に納得できないものを感じているケニアの若者達に遭遇する機会を得た。(元)議員のジョージ アンヨナ、(元)学生リーダーのジェームス オレンゴ、アンヤング ニョンゴ教授、オコ オンバカ博士、アチエノ オジアンボ博士のような大学人やエンギギ ワ チオンゴのような異端の宗教家、パトリック スンバのようなジャーナリスト、オヤンギ ムバヤやオウマ ムガ教授のような(元)外国抑留者と親交を深めることができた。彼らは1990年代のケニアの民主主義復興運動にオディングと共に参加して行った。

荒野の時代は、オディングにとって、ルオー家族の長として、成熟する時期でもあった。子供達は教育を受け、結婚し、夫々の家庭をもった。オディングは、彼の家族の幸せを考えた。新指導者や教育を終えた家族との関係で、オディングは、最後の20年間をその世

代の人々の中で最も知識に富んだ人として過ごした。1960年代の彼の批判活動は、しばしば、オカチク オガダやその当時の若者ウィルソン エンドロ アヤのようなノン=エリートの若い活動家との協力関係を生み出した。彼の取り巻き達は、その頃、トム ムボヤの取り巻き達と比較されたものだが、ムボヤの目指す所は漸次西洋社会であったし、ムボヤ自身が自らをモダンな人間と看做していた節があった。1980年代になって、対照的に、オデインガの協力者達は、おおびらに、自らを「同世代の中で最も秀逸且つ最も賢いグループ」といって憚らなかつた。彼らのうちの多くが、1990年代初期の政治運動の若き指導者となつていった。

## (8) 新しい秩序に向けて 1990—1994

オギンガ オデインガの生涯の最後の4年間は、ケニアにとって、また、世界にとって変化の多かった時だった。1989年の初め、東ヨーロッパで、中国で、そしてアフリカで、民主主義の変革の為の世界的な運動があった。2超大国のひとつ、ソビエト連邦が存在しなくなったのだ。その代わりロシア、ジョージア(グルジア)、カザフスタン等の新しい国々が誕生した。ユーゴスラビアやチェコスロバキアなどの以前の共産主義体制は力を失い、ボスニアやチェコ共和国が取って代わつた。ケニアでも、1989年後半から、一党制のシステムを廃止し、代わりに多党制を導入すべしという叫びが増大した。この新時代の推進者の中には、教会、人権運動家、医者や弁護士のような知識人、学生達、大学の講師達、そして婦人達の諸組織があった。

1990年の半ばまでに、ジャラモギ オギンガ オデインガは、前閣僚のケネス マチバや、チャールス ルビアや、ライラ オデインガと組んで、多党制(Open Multi-party Policy)を要求するようになった。オデインガは、新党として民主党(The National Democratic Party)を正式登録しようとしたが、政府は、これを拒否した。代わりに、オデインガ達は、7月に公然たる市民運動を呼びかける事になった。遂に4人の中心人物は、1990年7月7日に、カムクンジ広場で、公然たる政治集会を呼びかけた。KANU政府は、これに対してライラ オデインガ、マチバ、ルビアを逮捕留置して阻止を図つた。しかし、今や一般の人々が変化を求めていた。抵抗と示威運動がナイロビ、中央ケニア、キスム等で展開された。1991年の新年までに、オデインガは、公開書簡をモイ大統領宛に出し、1991年をケニアにとって民主主義の年になるようにする事を約束させた。外国勢力もこれに呼応し、アメリカ合衆国のスミス ヘムストーンは、同盟諸国、IMF、世界銀行に対し、ケニア政府が民主主義化を受け入れるまで、ケニアに対する援助を凍結するように働きかけた。結局KANU政府は、これらの圧力に屈し、憲法2A項を修正し、1991年の終わりには、「多党制」を許可するに至つた。

熱狂的な大衆が、ナイロビのカムクンジ広場で、FORD (Forum for the Restoration of Democracy)の門出を祝った。ジャラモギ オギンガ オデインガは、そのFORDと命名された野党の代表に就任した。マシンデ ムリロ、マーチン シクク、ジョージ エンテング等が最高指導部に選ばれた。しかし、この野党戦線は短命に終わり、1992年5月までに、マチバとシククがグループから離脱し、FORD-Asiliを形成した。オデインガのグループは、その党派にFORD-K(Ford-Kenya)と命名した。後に他のグループがFORD-Asiliから再分離し、ケニア国民会議 (The Kenya National Congress=KNC)を形成した。一方ムアイ キバキ (Mwai Kibaki=現第三代大統領)は、民主党 (the Democratic Party=DP)を結成した。従って、1992年の終わりに行なわれた大統領選挙では、KANUに対し、多数に分断された野党が夫々対峙することになった。選挙の結果は、モイが、190万票を得て大統領に当選し、一方マチバは140万票、キバキは100万票強、オデインガは94万5千票を記録した。議会議員の分布では、KANUが、101議席を確保し、野党は87議席であった。モイは政府を組閣し、オデインガは野党の代表となった。

1993年に、オデインガは、議会内活動で、彼の党の活発な指導に乗り出した。先ず彼は「影の内閣 (Shadow Cabinet)」をイギリスの議会方式に倣って指名した。綿密に議会内討論を行ない、西洋の議会のモデルで愛国的野党 (the Loyal Opposition)を作り上げる努力をした。オデインガは、政府の浪費や墮落を積極的に批判したが、政府と野党の間を調整する努力を惜しまなかった。結局FORD-Kの議員の心もとなさにも拘わらず、これがモイとオデインガの関係を好転させることになった。

この最後の2年間の活動は、「多党制」が復活したという意味でケニアの歴史にとって重要であった。同時に、その間は、「批判の自由」、または、一般的に言えば「表現の自由」を復活させた時期であった。野党は、公務員と政府はもっと公費に責任を負うべきだとの圧力をかけながら、「透明な政治 (Transparency)」と「説明責任 (Public Accountability)」を強く求めた。議会は、注目を浴びたゴールデンベルグ スキャンダルで、国民的討論を盛り上げる重要な場になり、大いに活性化した。市民社会は、政治的空間を取り戻し、主に、行政や警察の気まぐれな圧力に対抗した。プレスも自由をある程度取り戻したし、頻繁に起こる圧力に抵抗して、地盤を守ろうとした。政治は、新しい指導者を求め、全ての新指導者を受け入れるようになっていた。アンヤン エンヨンゴ教授、ライラ オデインガ、ムキサ キツイ等がそれであった。だからこの2年間はケニアの再民主化への移行にとって重要な時期となったし、オデインガの野党に対する木目細かい「後見」がケニアの政治の発展にとって大きな働きとなった。

ジャラモギ オデインガの最後の月、1994年1月は、党活動や家族の行事など、い

つもの多忙なスケジュールで始まった。しかし彼は病を発しており、遂に1994年1月21日に帰らぬ人となった。82歳であった。長年のライバルに対し、モイ大統領は、「オデインガは、1992年以来ボンド選出の議員であり、野党の代表的指導者であった。

1953年にアフリカ地区評議員として、政界入りし、1957年にニヤンザ代表となり、更に中央ニヤンザ選出議員となった。1960年にギチュルと共に、KANUの初代副会長に就任した。1963年に、内務大臣に、1964年にケニア共和国初代副大統領に就任した。オデインガは、友であり、勇気ある男であり、偉大な男だった。深甚なる哀悼を捧げたい」と語った。しかし、政府は、彼に国葬を認めなかった。約5万人がナイロビのウフル公園に集まり、キスムで行なわれた彼の葬儀には、数千の集団が集まり、更にもっと多くの人々が、彼の墓場になる故郷のニヤミラ カンゴ カ ジャラモギまでその棺を見守った。オデインガは、1984年に没した彼の妻の傍らに埋葬された。

オデインガの盟友の一人ジェームス オレンゴは、オデインガの墓に跪いて、「私はここにオデインガの埋葬に来たのであって、彼を褒め称える為に来たのではない。マーク アントニーの如く、私は、心がオデインガと共に棺の中にあり、再び戻るまで佇み続けるしかないといいたい。この棺の中には一人の偉大な男が眠っている」と語った。

## (9) 最終章

個人の生涯を歴史家がどう評価するだろうか？歴史の中で個人はどんな役割を担うのだろうか？歴史家達は、「一つの生涯を評価する為には、個人の生涯を、ある脈絡におく必要がある」と主張する。つまり、個人の生涯とその生きた時代背景の両方を研究することが必要だというのだ。時代こそが個人の生涯にとって挑戦と機会の得失を齎しているからだ。歴史家達は、また、「公的な生涯を送り、社会の為にその生涯を捧げているような個人は、その社会について明確なビジョンを持つべきだ。この個人とビジョンの結合が、生涯をかけて達成すべき目標を決定する。社会は、また、この目標が達成されたかどうかを議論する事ができる」といっている。オデインガの生涯についてだが、先ず、国に自由を齎そうとした一人の若者として彼は登場した。そのビジョンは、彼を、経済的且つ政治的な努力に導いた。時はまさに、ケニアが植民地から自由となり、更に第二の独立を模索していた。歴史は、ジャラモギ オギンガ オデインガを、彼の生涯の「志」である「祖国ケニアの精神的、宗教的、経済的かつ政治的自由の達成のために捧げる事」と「人民に対して常に忠実であり続ける事」の二つを、その生涯の早い時期に決意した男として評価するであろう。

しかし、歴史はまた彼の欠点をも見逃さずに論じようとする。

オデインガは、あまりにも「伝統主義者」過ぎはしなかったか？

オデインガは、余りにもルオー的ではなかったか？

オデインガが育った世界は、基本的にアフリカだった。植民地主義が破壊しようとしたのはこの世界であった。オデインガは、彼のアフリカ人らしさを強調することで、彼自身を植民地主義から守った。彼のビジネスから社会主義までの好奇心の広さから明らかなように、彼は正しく「20世紀の人間」だったし、伝統性と現代性をうまく兼ね備えていた。彼は子供にクリスチャンネームをつけることを拒否したが、メルセデスベンツに乗っていた。時間に正確であり、ボードミーティングでは厳しい会長だった。彼は決してトップ（社長）にはならなかった。

オデインガは、ケニアを正しく導いたのだろうか？

1960年代に、財産のあるものは彼の「大衆的な言葉」を恐れた。他のものは、彼の多くの案件でみせた「反西洋の立場」を恐れた。しかし、彼自身は、小さい事業から始めて、遂には巨富を築いた、典型的なケニアの起業家の好例であった。ポイントは、彼の国家に反対する議論が、「公平、社会的責任について」であって、「私有財産」に反対したわけではなかったという事だ。1960年代の彼のビジョンは、1990年代と同じで、「公正な社会」を目指していたし、彼が抱いていた目標は、同輩達によって引き継がれた。

オデインガは、権力を理解していたか？

オデインガはしばしば「何故同輩たちは権力を欲しがるか」と悩んだ。なんとなれば、彼は、「同輩たちが、権力を求める理由もわからず、権力だけを求めている事」を見抜いていたからだ。よき「指導力」とか、「墮落に反対する立場」とかについてのオデインガの考えは、「権力を墮落させないためには、適切に行使されなければならない」ということを、普遍の真理としていた。

オデインガは、彼の同時代人とどの様に比較されるだろうか？

彼のケニアについてのコミットメントは、ジョモ ケニアッタやトム ムボヤのそれと比較されるだろうし、彼の汎アフリカ主義では、クワメ エンクルマと、またアイデアの人としてジュリウス イエレレ（タンザニア大統領）と比較されるだろう。

ケニアの歴史がジャラモギ オギンガ オデインガの真の価値を判断するだろう。

オリジナル文献

Makers of Kenya's History "Jaramogi Oginga Odinga"(E.S.Atieno Odhiambo)  
(Series Editor; Prof. Simiyu Wandibba)